私の漢字教育観

吉田　きょうは石井先生においでいただき「教育実践の底流」という連載対談の最終回にしたいわけです。いままでは実践家のかたの登場が多かったわけですが、石井先生は必ずしもそうではなくて、学者であってしかも教育実践に熱意を持たれ、有名な「石井方式の漢字教育」というようなことをおやりになっておられます。そういう実践への熱意を支えてきた基本に、いったいどういう発想がおありになるのかというようなことを、伺ってみたいと思います。

最初に石井方式というのが、いまどういうふうに発展しているかという話をしていただいて、それからお考えのほうに移っていきたいと思います。

石井　そうですね、いちばん先に発表しましたのは、昭和 26 年全日本国語教育協議会の全国大会で、東京都八王子の指導主事をしており、意見発表しました。そのときには、私自身、実践してはいなかったのです。自分の子どもに対する実験とか、単なるひとつの思いつきみたいなもので、こうやったらいいんじゃないかというような提案にしかすぎなかったわけです。

昭和 28 年に小学校の教師の資格をとりまして、28 年の 4 月から一年生を担任し、26 年に発表したことを、実際に実践に移していきました。それを 41 年まで続けたわけです。14 年間やりました。そして、その間いちおうやってきたものを、一冊の本にまとめました。それが『私の漢字教室』というはじめての著書なんですが、それが“石井方式”と呼ばれるようになったものなんです。

私はよく言うんですけれども、石井方式というのは、じつは不満なんです。石井方式と呼ばれたことが非常に残念なのです。というわけは、私の考えは、基本的にはきわめて常識的なだれもが当然考えなければならないものであって、そういう考えかたは外国では常識になっているんです。日本だけが国語教育で、ことに表記の問題ではいわば常識はずれのことをやっているわけなんです。常識的なもののほうが、やってみたら効果が上がった。これが昭和 28 年から 36 年に至るまでの私の実験でわかったものですから、それでそれを主張したわけです。ですから、石井方式ではなくて、これは常識中の常識なんです。